



**日本老年行動科学会**  
Japanese Society of Behavioral Sciences for the Elderly

## お知らせ No.18

<学会事務局>

〒166-0013 東京都杉並区堀ノ内1-24-1

電話・FAX: 03(5941)5270

<学会ホームページ>

<http://www.soc.nii.ac.jp/jsbse/>

### 会議・催事のご案内

#### 第202回ACSのご案内

日時：2009年4月18日（土） 15：00～17：30

会場：明治学院大学白金キャンパス

テーマ：「帰宅願望が強く、興奮しやすい高齢者の事例」

発表者：特別養護老人ホームみやもり荘 生活相談員 菊池 昌浩

昨年、岩手支部ACSで発表された“民話のふるさと”遠野市の施設による事例です。

本部からコメンテーター役の講師を派遣いたしましたが大変内容のある事例であったとのこと。そして、その時の講師であった米山 淑子 常任理事が今回もコメンテーターを務めます。

交流会：ACS終了後、岩手支部の発表者、常任理事の先生方との交流の場を予定いたします。

※詳細・お申込みにつきましては、別紙「ACSのご案内」をご覧ください。

#### これからのACS日程・会場について

5月16日（土）第203回 会場：明治学院大学白金キャンパス

6月は本部⇄支部交流企画による、大分支部からの事例発表です

6月13日（土）第204回 会場：明治学院大学白金キャンパス

7月11日（土）第205回 会場：筑波大学大塚校舎

（最寄り駅：東京メトロ丸の内線 茗荷谷駅より徒歩2分程度）

8月下旬（土）第206回 東関東支部と共催につき開催期日・会場調整中

9月12・13日 全国大会内でACS発表

10月10日（土）第207回 会場：筑波大学大塚校舎

11月14日（土）第208回 筑波大学入試のため会場調整中

12月12日（土）第209回 会場：筑波大学大塚校舎

会場・期日とも、お知らせNo.16でお知らせした一覧から変更されております。

これまでACSは原則「第3土曜日」とお知らせしていましたが、7月から会場が明治学院大学から筑波大学大塚校舎に変更になることに伴い、日程を変更させていただきました。

#### 東関東支部ACSのご案内

日時：2009年6月14日（日）13:15～17:00

会場：茨城県県南生涯学習センター小講義室2

（住所：茨城県土浦市大和町9番1号 ウララビル5階、TEL：029-826-1101(代)）

テーマ：「精神障害のある高齢者へのケア（仮）」

発表者：特別養護老人ホーム相談員

参加費：会員 無料／非会員 500円

申し込み・連絡先：〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-2 0-1

つくば国際大学 産業社会学部社会福祉学科 山本 哲也 まで

TEL：029-883-6139（直通）

FAX：029-883-6139（直通） ※9:00～20:00 お願いします。

029-826-6937（代表） e-mail:t-yamamoto@tius.ac.jp

## 2009年度第2回常任理事会が開催されます

日 時：2009年4月18日（土）12:00～14:30

会 場：明治学院大学白金キャンパス

※同日のACSに先立ち、開催されます。

議事内容は次回『お知らせ19号』でお伝えいたします。

なお、会議終了後、常任理事会のメンバーがACSに出席し、グループ討議に参加いたします。

## 第4回老年行動科学講座のご案内

お待たせいたしました。

講師とスケジュールが確定しました。

今回の講座のキーワードは「行動科学とケア」。

サブタイトル“高齢者のケアに活かす行動科学”が示すとおり、本学会の基盤である「老年行動科学」に真正面から取り組むテーマと講師陣をご紹介します。

ケアのレベルアップを目指す方、そして日常のケアの閉塞感や倦怠感を排除し、ケアに新たに取り組む力を育みたいと願う方には是非ご参加いただきたいと存じます。

募集要項は4月中旬に発送いたします。振るってご参加ください。

### 第1回講座 7月26日（日）『行動科学の方法とケアへの応用』

講師：佐藤 眞一 明治学院大学心理学部教授（本会 会長）

### 第2回講座 8月30日（日）『ケアプランの策定 ～行動科学的な視点から～』

講師：真砂 良則 北陸学院大学社会福祉学科長 教授（本会石川支部長）

### 第3回講座 9月27日（日）『行動科学視点からの事例検討の方法

～対象者の理解と対応～』

講師：大川 一郎 筑波大学大学院教授（本会 副会長）

### 第4回講座 10月25日（日）『外的環境の工夫を通じた不適応行動の改善策』

講師：宮 裕昭 市立福知山市民病院 臨床心理士

### 第5回講座 11月29日（日）『診る力を養う』

講師：川本 利恵子 九州大学大学院 医学研究院保健学部門 教授

（本会 理事）

### 第6回講座 12月26日（日）『高齢者ケアにおける行動科学の可能性』

講師：第1部 照井 孫久 東北公益文科大学 准教授（本会 評議員）

第2部 宮島 渡 高齢者総合福祉施設アザレアンさなだ施設長

（本会 長野支部長）

第3部 照井 孫久 講師と宮島 渡 講師に佐藤 眞一 教授を交えて、  
鼎談「老年行動科学の可能性について」



## 日本老年行動科学会第12回大会 準備委員会より

新年度を迎え、会員の皆さまたちには新たな気持ちでお仕事に向かわれていることと推察申し上げます。

さて、3月に第12回大会の第1号通信をお送りしましたが、準備委員一同、大いに学び、しかも楽しい大会にしたいと知恵を絞っています。

スケジュールの概要は次のとおりです。

9月12日（土）	10:00-10:20	開会式
	10:30-11:20	大会会長講演（公開）
	11:20-12:10	特別講演： 厚生労働省老健局長 宮島俊彦氏（公開）
	12:10-13:20	昼食
	13:20-14:20	レクチャー：事例検討会・ACSの新方式
	14:20-17:00	事例検討会・ACS（4室予定）
	17:30-19:30	懇親会
9月13日（日）	9:30-11:00	研究発表（4室予定）
	11:10-12:40	ワークショップ （タクティールケアなど4室予定）

4月下旬に第2号通信では、研究発表演題やケースワーク事例の募集をいたしますので、奮ってご応募いただきたいと思います。

なお、「ケアする人」が少しでも元気を得ていただけるように、+αを考えていますが、皆さんからもご意見をお寄せいただけると嬉しいです。

ぜひぜひ本大会参加の予定を手帳に書き込んでください！



荒木大会長

### 事務局からのお願い ～2009年度の年会費お振込みについて～

いつも日本老年行動科学会をご支援いただきありがとうございます。

本年度の会費は、もうお振込みいただきましたでしょうか？

学会の運営と活動は会員の皆様の年会費で維持されております。お忙しい中とは存じますが、お早目のご納入をよろしくお願い申し上げます（既に振込みがお済みの方には失礼致しました。御放念ください）。

#### 【会費】

個人会員／年額	8,000円
団体会員／年額	30,000円

学生会員／年額	4,000円
賛助会員／年額一口（何口でも可）	20,000円
本会の会計年度は	1月1日より12月31日まで
振込先：郵便振替口座	00100-8-567890
加入者名	日本老年行動科学会
★納入状況等、ご不明の点は事務局まで	お問い合わせ下さい。

もし、会費ご納入の郵便払込取扱票が見当たらない場合、ご遠慮なく事務局にご連絡ください。折り返し所定の郵便払込取扱票をお送りいたします。

## 以心伝心よりも話して伝心

～家族とは～

…中央法規出版「歳をとることが本当にわかる50の話」より

「歳をとる」とはどういうことでしょうか。「認知症」とはどんな状態なのでしょう。この学会に関心を示した皆さんは、既にそのようなことは経験的に、あるいは本などからの知識を得てよくご存知かもしれません。

でも、どんな状態になるかはわかっていても、その背景となる心理はどうでしょうか。お年寄りを子ども扱いしたり、徘徊や盗癖などの問題行動を「認知症だから」で片付けたりはしていませんか？分かっているようで実は分かっていないこともあるかもしれません。

このコラムでは、日本老年行動科学会の前会長で、現在は駿河台大学教授である井上勝也氏が、長年の高齢者研究の経験から、「水をほしがる人にパンを差し出すような見当違いの対応」が少しでもなくなるよう、高齢者の心と行動について語ります。

※なお、本連載は井上教授の許可を得て、過去に発表された文章を再掲させていただいています。

米国の某大学の建物の10階にある2つの教室に、10人ずつ2組の学生がやってきました。ある心理実験の被験者になるために来たのです。

被験者となったこの2つのグループは、一方は大学のサッカーチームのメンバー、他方はお互いにまったく見ず知らずの学生同士です。

さて、約束の心理実験はなかなか始まらず、両群ともじりじりしてきました。するとそのとき、遠くから消防車のサイレンの音が聞こえ始め、だんだんとこの建物に近づいてくるようなのです。しかもそのとき、廊下を「火事だ！ 火事だあー！」と叫びながら人がドヤドヤ走っていく足音。そして、ドアの下の透き間からキナ臭いにおいととも白い煙が入ってきました。何台にも増えた消防車から、サイレンの音は限りなく大きく響いています。廊下を逃げる足音もどんどん増え、どうやら火が近づいてきているようです。そしてなぜか、この2つの部屋は外からガッチリ鍵がかけられていたのです！

むろんこれは偽りの火事です。さて、この2つのグループはそれぞれどのような行動をとったのでしょうか(それこそが、実は心理実験でした)。その一部始終は、秘かに取りつけられたビデオカメラなどで記録されていたのです。

常識的には、組織的集団であるサッカー

チームは、この危機に対してより組織立った行動をとり、リーダーの号令のもと、みんなで力を合わせてドアをぶち破り窓から声をあわせて助けを呼び、シャツを脱いで旗代わりにするなどの行動をしそうです。しかし実際にそうしたのは、サッカーチームではなく、鳥合の衆であるもう一方の学生集団だったのです。なぜそうなったのでしょうか。

### 【親しさがアタになる？】

サッカーチームは、いつも親密なつきあいをしているツーカーの仲です。こうした親密な集団の中では、お互いの情報や気持ちを伝え合うコミュニケーション通路は、網の目状によく発達しています。

そして実はこの効率の良い情報ネットワークは、感情を伝えるときにも、素早く機能するのです。つまり、この中のだれか1人が“パニック感情”に襲われてしまうと、その感情は効率の良い情報網を伝って、すぐに全体に広がってしまいます。こうしてサッカーチームは、皆がパニック状態に陥ってしまったのです。

一方、見ず知らず同士の集団、鳥合の衆は全然心のつながりはありませんし、効率の良い情報網もありません。したがってだれかがパニック感情に襲われても相互に“心

ただちに他に伝わらないのです。こうしてグループ全体として冷静さが保たれてパニックにはならず、結果として落ちついた合理的な行動ができたのです。

この実験結果が、どのような場面のどのような集団にも常にあてはまるといっわけではありませんが、場合によってはこのように、仲の良いしっかりと情報を共有できる集団が、そうでない集団よりも危機に陥ることがあるのは、事実なのです。

ところで、私たちの日本の“家族”は、この2つの集団のどちらによく似ているでしょうか。いうまでもなく、見ず知らずのほうではなく、サッカーチームのほうによく似ています。たとえば、家族メンバーのどれかの死、大ケガや重大な病気、主たる経済の担い手の失業、子どもの受験の失敗、結婚や恋愛の破綻、祖父母の認知症、もちろんこれら以外にその家族固有の問題が山ほどあるでしょう。これらがただちに家族内を駆けめぐり家族全体の問題となり、それにみんなが圧倒されてパニック状態になってしまい、場合によっては一家離散のような状況が現実にかかるのです。

さて、ではそうならないようにするには、いったいどうしたらよいのでしょうか。この実験結果に沿って考えてみましょう。

### 【逆説的な「話すことによる距離」】

実験から必然的に導かれる対応法ですが、家族メンバー間に“適度な”距離が保たれていることが、パニック状態にならないための必要な条件です。

何かを解決したり結果として笑顔を取り戻すためには、相手がよく見え、問題点がよく見えることがその第一歩なのです。そのためには、相手がよく見える、つまり“距離”が必要なのです。涙の量が少ないからといって、それは“冷たい”からではありません。むしろ笑顔を取り戻すための解決策を探ろうとする家族のもつ“真の温かさ”があるからだともいえるのです。

ところでその距離は、この実験では(他人同士ですから)すでにありました。しかし家族間では、それをつくり出さなくてはなら

ないのです。それにはどうしたらよいのでしょうか。

「以心伝心」はいけません。まず、当の悲しみや怒りや恐れの原因となっている問題を何としてでも「口にす」ことです。それには夕食で家族が集まるとき、あるいはだれかの誕生日や法事や家族内行事などの少しふだんとは雰囲気がちがうようなときが、あらたまって“口を切る”いいキッカケになるかもしれません。

どちらにしても、問題を解決するための“知的”活動は、単に感じるのではなく、それ(問題)を対象化し、その対象をあれこれ言葉で考えなければなりません。このように対象(問題)を言葉で考え始めるということは、すなわちそれだけで良い意味での“距離”ができたことを意味するのです。普通、よく話す、ということは相手を理解するうえで必要なことと考えられています。しかしそれは、このように「話すことによる距離」という逆説的な理解をも意味しています。

このように、“距離”をつくる第一歩は、問題の言語化(すなわち対象化)、言葉にしてあれこれ考える(あるいは議論する)ことから始まります。腹や目で話すのではなく、まさに言葉で話すことです。話すよりも感じることの多い“日本型家族”には、ぜひとも必要なことではないでしょうか。

高齢者に関する問題はもちろん、それ以外の家族の問題も解決しなければならないようなとき、ぜひこの心理実験を思い出してください。



井上 勝也 教授

「井上教授のコラムアーカイブ」は隔月掲載の予定です。